

ブルームはなぜパントマイムソングを 書かなかったのか

—背景にある政治と劇場事情—

小田井 勝彦*

『ユリシーズ』第17挿話417行目から445行目で、ブルームが以前にパントマイムのトピカルソングの作詞を依頼されたことがあるという事実が突然明かされる。読者はこの一節を読む時、文芸の才能があるステイーブンならともかく、そもそもブルームに作詞の依頼など来るのかという疑問をはじめに抱く。また、この一節は、『ユリシーズ』の後半の章で特徴的な「信頼できない語り手」の典型的な例であり、以下に考察するような多くの間違いを含み、現代の読者による読解を阻んでいる。

まず本題に入る前に、この一節の「信頼できない語り手」による問答がいかにも不正確なものであり、現代の読者を遠ざけているかという点から確認していきたい。最初に、417行目から427行目の11行に及ぶ問いの部分である。

What had prevented him from completing a topical song (music by R. G. Johnston) on the events of the past, or fixtures for the actual, years, entitled *If Brian Boru could but come back and see old Dublin now*, commissioned by Michael Gunn, lessee of the Gaiety Theatre, 46, 47, 48, 49 South King street, and to be introduced into the sixth scene, the valley of diamonds, of the second edition (30 January 1893) of the

*専修大学法学部兼任講師

grand annual Christmas pantomime *Sinbad the Sailor* (produced by R Shelton 26 December 1892, written by Greenleaf Whittier, scenery by George A. Jackson and Cecil Hicks, costumes by Mrs and Miss Whelan under the personal supervision of Mrs Michael Gunn, ballets by Jessie Noir, harlequinade by Thomas Otto) and sung by Nelly Bouverist, principal girl? (Ulysses 17. 417-427)

このパントマイムの公演は1893年1月に実際に行なわれたものであり、Herrの122ページから123ページに公演のプログラムの複写がある。日付やスタッフなど多くの部分は正確なのだが、3箇所だけ実際の公演とは異なる部分がある。

まず、作曲者はR.G. Johnstonとなっているが、実在の人物ではない。ブルームは結局作詞をせず、曲も存在しないので、ここは架空の名前でよいかもしれない。しかし、Greenleaf Withersが脚本だったのをアメリカの詩人と混同させてGreenleaf Whittierとし、Kate NeveristとNellie Bouverieという2人の出演者の名前を組み合わせ、Nelly Bouveristとしているのは、語り手による何らかの恣意性を感じさせるものであり、語り手の信頼性を著しく損なうものである。

さらに6項目挙げられた理由の部分を読んでいくと、読者はさらにはぐらかされた感じを受けるはずである。

Firstly, oscillation between events of imperial and of local interest, the anticipated diamond jubilee of Queen Victoria (born 1820, acceded 1837) and the posticipated opening of the new municipal fish market: secondly, apprehension of opposition from extreme circles on the questions of the respective visits of Their Royal Highnesses the duke and duchess of York (real) and of His Majesty King Brian Boru

(imaginary): thirdly, a conflict between professional etiquette and professional emulation concerning the recent erections of the Grand Lyric Hall on Burgh Quay and the Theatre Royal in Hawkins street: fourthly, distraction resultant from compassion for Nelly Bouverist's non-intellectual, non-political, non-topical expression of countenance and concupiscence caused by Nelly Bouverist's revelations of white articles of non-intellectual, non-political, non-topical underclothing while she (Nelly Bouverist) was in the articles: fifthly, the difficulties of the selection of appropriate music and humorous allusions from Everybody's Book of Jokes (1000 pages and a laugh in every one): sixthly, the rhymes, homophonous and cacophonous, associated with the names of the new lord mayor, Daniel Tallon, the new high sheriff, Thomas Pile and the new solicitor general, Dunbar Plunket Barton.

(*Ulysses* 17. 428-445)

1 番目は、ビクトリア女王の60周年祭と新しい市営魚市場の開場のどちらを題材にするか迷ったことであり、どちらも1897年の出来事で、公演の時点からは4年も先の話であり、「トピカル」とは言い難いのではないかという疑問を読者は抱き、国を挙げての王室の行事と市民のための施設の開場という並置は、あまりにも不釣り合いである。2 番目の理由も、実在の人物と架空の人物を並べるということが1 番目と同様に不釣り合いであり、またヨーク公のアイランド訪問も1897年で、作詞を考えていた時点では知るはずのない時代錯誤であり、3 番目もやはり、両劇場とも開場は1897年で、時代錯誤である。前半の3つの理由で、語り手の信頼性は完全に崩壊するのである。

そして、4 番目は、ブルームが出演者の下着の露出を目にして興奮してしまったというものであり、5 番目はジョーク本で適切なジョークが見つ

からなかったという両方とも瑣末な理由であり、読者は馬鹿馬鹿しいという思いを抱き、深く思索することを止めてしまうはずである。最後の6番目も3人の脚韻がそろわないという瑣末な理由であり、また彼らの就任は1893年の時点では知るはずのない時代錯誤である。

ここで多くの読者は語り手に対して不信感を抱く。この一節すべてが語り手による虚構であると考えられることも可能であるが、これらのアナクロニズムにあえて理由づけをすれば、ブルームは依頼された作詞が完成できなかった後も創作に興味を持ち、考えていたということになる。第4挿話においても、新聞の懸賞小説を読み羨望していることわかるように、ブルームは文芸の創作に大に関心がある。

結局ブルームには創作の才能はなく、これまで完成したものはないのだが、長年に渡って創作を試みようとした時に何を考え、何が障害になったのかがこの一節に表れているように思える。そして、この一節の背景は1890年代であるが、この時期にジョイスは思想形成期にあたる10代の青年であり、これから創作を志そうと考えていた。したがって、ブルームの逡巡は創作を開始する前のジョイス自身の逡巡でもあったと考えられるのである。そして、この信頼できない語り手が読者を煙に巻くことでしか表明できない創作をする上での困難な状況があったと考えられる。

そして、当時の出来事や固有名詞を多く含むこの一節は、当時のダブリンの読者には現在の読者とは異なる暗喩を持っていたはずである。そこで、当時の背景と照らし合わせながら、テキストに書かれていない暗喩を探索し、創作を阻害する要因を考察することが、本稿の目標である。

そこで、まずは6つの理由のうち半数の3つを占めている政治史について考察し、その後、理由の3番目と4番目に表れている劇場事情を考察していく。

1

1 番目, 2 番目, 6 番目の理由に表れているアイルランド政治史についてであるが, ヨーク公訪問, ビクトリア女王の60年祭(“Diamond Jubilee”)という出来事がテキストに登場しているので, 王室との関わりでアイルランド史を振り返ることにする。

1800年の統合以降, 初めてアイルランドを訪問したのは, ジョージ4世で, 1821年のことである。船で到着したホースには, 歓迎する多数の民衆が集まり, その民衆の中にジョージ4世は自ら分け入り, 無分別に民衆と握手した。また, サックビル通りでのダブリン市への公式入場のパレードでは, 帽子の前面についたシャムロックを繰り返し指さしながら, 帽子を振りつづける王のもとに興奮した民衆が駆け寄り, 馬車が1時間近く立ち往生するという事態まで起こった。帰国の際, そのような民衆の熱狂的な歓迎ムードに後押しされ, オコンネルは棧橋で跪き王を見送ったとされている。このように, ジョージ4世の訪問は, アイルランドの大衆の忠誠心を高めることに大成功し, その後, 王室の訪問はイギリスとアイルランドの統合を強化するために積極的に利用された。

その次の訪問は, 1849年のビクトリア女王である。1907年にトリエステで行なった講演「アイルランド, 聖人と賢人の島」(“Ireland, Land of Saints and Scholars”)においてジョイスは, アイルランド人はキャベツの芯を投げつけて迎えたと言っているが, 実際には何千人もの人が港に詰めかけ, 女王はジョージ4世の時と同じく熱狂的な歓迎を受け, 大成功した。ビクトリア女王はその後1853年と1861年に2回訪問している。その夫アルバートが亡くなって, 女王が公の場から姿を消してからは, のちのエドワード7世となる皇太子が代わりに訪問するようになった。女王と皇太子の訪問は, 博覧会に来場して大英帝国の発展を印象付けるためや, 蜂起を鎮圧し

た後などであり、ナショナリズムの敗北を印象付けるために利用され、大きな成功を取めた。

しかしながら、1870年代からは様子が一変する。アイザック・バットが自治運動を開始し、農地紛争が多発、フィニアン蜂起の逮捕者への恩赦運動などでナショナリズムが過熱し始めた1871年の訪問時には、総督公邸で皇太子が総督と会見中、すぐそばのフェニクスパークで恩赦を求める集会が開かれ、警察が鎮圧する事態となった。さらに、1885年の訪問時には各地でデモに遭遇し、皇太子は19世紀中にはアイルランドを訪問しないと心に決め、実際世紀が変わりエドワード7世として即位するまで訪問は行なわれることはなかった。

この1885年はパーネルによるナショナリズム運動が最高潮に達した時期である。オコンネルやバットとパーネルの違いは、パーネルはイギリスや女王に対する批判を無制限に行なったことだと、Loughlin (171) は述べている。ビクトリア女王は大飢饉の際に、実際には2000ポンドも支援をしたのに、100ポンドしか支援を行なわなかった“Famine Queen”であるという神話をパーネルは促進し、それにより彼は「無冠の帝王」としての権威を勝ち取ったのである。ジョイスは、「アイルランド、聖人と賢人の島」において、

Once, it is true, when there was a horrible disaster in county Kerry which left most of the county without food or shelter, the queen, who held on tightly to her millions, sent the relief committee, which had already collected thousands of pounds from benefactors of all social classes, a royal grant in the total amount of ten pounds.

(*Critical Writing* 164)

と述べており、ジョイスもその神話を信奉していたと考えることができる。

そして、ナショナリストの間でイギリス王室に対する不敬が広まった。例えば、ダブリン市においては、それまで行なわれていた女王の健康を祝しての乾杯は、1880年代初頭からは行なわれなくなり、1883年のヨーク公の結婚に際してもあいさつを行なわれなかった。ダブリン市は、1881年までは自由党と保守党が交互に市長職に就任していたが、1882年からは自由党のナショナリストのみが就任することになり、この頃には完全にナショナリストの手に移っていたからである。

その後1885年、自治を目指し宥和政策を掲げる自由党とアイルランド議会党の連携、それに対抗し弾圧政策を取る保守党とアルスターユニオニストの連携という構図が成立する。そして、「君臨すれども統治せず」とは名ばかりで、ビクトリア女王はグラッドストーンとパーネルを毛嫌い、保守党に肩入れし、自治を阻止するために積極的に動いた。そのため、80年代、90年代のグラッドストーン政権下では王室の訪問は行なわれていない。

1886年、グラッドストーンは、議会に自治法案を提出するが否決され、保守党のソールズベリーに政権を引き渡すこととなる。そしてその翌年、保守党政権による弾圧政策に対する反発が起こっている中、女王の在位50周年祭（“Golden Jubilee”）が行なわれた。50周年祭は、

In as much as the Golden Jubilee of Queen Victoria's reign was a celebration of personal service to the country it was no less an exercise in monarchy-imperial mythology, a crucial landmark in the developing imperial identity of the British 'race'. The process entailed the mythicising not only of the Victoria's reign — fifty years of unalloyed progress — but of the person of the Queen herself: the fallible, partisan and prejudiced human being was apotheosized in a flood of published Jubilee slush as an abstract model of moral and national rectitude.

(Loughlin 219–220)

Supporters of home rule were casually referred to as disloyal by Conservatives. This was dangerous for the Liberal Party in Britain which now found itself portrayed as being in the camp of disloyalty. It was especially true during the queen's Golden Jubilee celebrations of 1887, which in Britain were hailed as a festival of the triumph of the union and the defeat of home rule. Irish Nationalist leaders, however, pursuant to the policy of excluding the monarchy from nationalist self-identity, placed themselves in opposition to the jubilee.

(Murphy 253) (下線は筆者)

と Loughlin と Murphy が述べているように、イギリスにおいては、大英帝国の発展と王室を結び付け、ビクトリア女王を神話化しようとするお祭りであり、統合の勝利とアイルランド自治の敗北を祝うものであった。しかしながらそれは、アイルランドのナショナリズムを最も刺激するものであったと Kenny (56) は述べている。アイルランドでは、“Famine Queen”のもとで苦しめられた50年間であり、お祝いには値しないということで、反対に教皇レオ13世の聖職叙任50周年を盛大に祝う、モード・ゴーンによる示威運動などが行なわれ、世界中の都市から祝電が届いたのにダブリン市からは祝電が届かないという事態となった。

しかしながら、さきほどの Murphy の引用の下線部にあるように、ナショナリストや自由党員たちはジレンマを抱え始める。王室に対して不敬な態度を取れば取るほど、ユニオニストや保守党員から不敬であると攻撃を受け、自治法案の成立が遠のくのである。それは自由党員たちにとって危険なことであり、自由党と連携するパーネル達国民党の国会議員たちは、王室への忠誠を明白に表明することを余儀なくされる。そこで、50周年祭と同時期に行なわれたアルバート・ビクターとジョージ王子の訪問は4日間と短いものであったが、2年前のように大きなデモに遭遇することはな

く、滞りなく行なわれた。また、1889年にはパーネルはグッドストーンと共に王室費に関する委員会の委員となり、王室費を増額することで王室に敬意を払う態度を見せている。その影響もあり、ダブリン市では1880年代初頭から中止されていた女王の健康を祝しての乾杯も80年代末期には復活している。

そして、1890年のパーネルの失脚とその翌年の死去により、アイルランド国民党は分裂し、ナショナリズムは大きな打撃を受ける。その後、再度政権についたグラッドストーンにより、再度自治法案が提出されるが、下院は通過したものの、結局上院で否決される。

1895年からは、10年に渡って保守党が政権に就くこととなる。保守党のアイルランド政策は、「弾圧と宥和」(“Coercion and Conciliation”), 「優しさで自治運動を殺す」(“kill home rule with kindness”) と呼ばれるものである。宥和政策として1898年には地方自治法 (“the Local Government Act”) が成立し、地方自治は選挙で決められることになり、結果アルスター以外の地方自治はナショナリストやカトリックの手に渡った。

保守党の宥和政策の総仕上げとして、両国の統一を印象づけるために行なわれたのが、王室の訪問である。1897年と1899年のヨーク公訪問は成功し、祖母ビクトリア女王の訪問への基礎を築いた。そして、1900年の女王訪問は、ボア戦争で戦った兵士の武勲を称え、アイルランド人兵士にシャムロックの着用を許可したことで、大衆の支持を得て大成功した。この時は、ダブリン市からのあいさつも行なわれた。また、1903年のエドワード7世の訪問も直前に亡くなった教皇レオ13世に弔辞を示したことで、カトリックからの支持を得て、大成功している。このように保守党政権の10年間はまさに「優しさで自治運動を殺す」ことに成功していたと述べる事が可能である。

しかし、水面下では新たなナショナリズムが進行していた。アイルランド語復興などを通して、イギリスとは異なる生活様式を模索しようとする、

文化的ナショナリズムである。1897年の女王の60周年祭は、イギリスでは50周年祭よりさらに帝国の繁栄を祝う行事となり、グラッドストーンが政界から退いてから2年後であるため、自治運動の敗北を印象づけるものであったが、アイルランドではそれに対抗し、1798年蜂起の100年、オコンネルの没後50年、教皇レオ13世の就任20周年などの行事が行なわれたり、モード・ゴーンによるストリートシアターが行なわれたりした。パーネル達のそれまでのナショナリストと大きく異なることは、王室抜きの共和主義であったことである。しかしながら、1897年と1899年のヨーク公訪問、1900年の女王の訪問は、直接的な衝突を受けることなく、成功を取めている。文化的ナショナリズムは1905年のシン・フェイン結党により本格化したものであり、90年代はユニオニズムとナショナリズムがせめぎ合っていた時代であった。

前置きが非常に長くなってしまったが、この背景を踏まえて、テキストに戻りたい。まず、1番目の理由に関してであるが、ビクトリア女王の60周年祭は、50周年祭の時と同様に、ナショナリストにとっては人々を飢えさせる“Famine Queen”のイメージを想起させるものである。それに対して、市営魚市場の方は、ナショナリストが支配するダブリン市によって開設された、人々に食べ物を供給する施設ということになる。一見、関係のない並置に思えても、ユニオニスト対ナショナリストの構図が暗示されている。

2番目の理由には、この構図が露骨に示されている。ブライアン・ボルーは、11世紀初頭にアイルランドを統一し、上王に昇りつめた人物で、アイルランド唯一の王である。クロンターフの戦いでの彼の死後、アイルランドは自国の王室を持つことはなく、19世紀になって政治上「無冠の王」と称されるパーネルが登場した。そのような歴史を考えると、当時の人々は特に、ブライアン・ボルーの名前と共にパーネルが想起されるのではないだろうか。60周年祭と共に、ヨーク公をアイルランドに訪問させること

で、両国の統合をゆるぎないものにしたくないユニオニストは、ブライアン・ボルーが想起させるパネルによるナショナリズムが復活、再燃することを恐れていた。それに対して、これまで概観してきたように、イギリス王室の訪問にはナショナリスト側からの反発があるのである。

最後の6番目の理由は脚韻についてしか述べていないが、ここにもユニオニスト対ナショナリストの構図が隠されている。彼らの経歴を見てみよう。

Daniel Tallon Lord mayor of Dublin 1898 and 1899 (elected in the fall of 1897). He owned and managed a pub on the corner of St. Stephen's Street and Great George Street South in south-central Dublin. (Gifford 572)

Pile, Sir Thomas Devereux 1st Bt., cr. 1900; merchant; b. 27 Feb. 1856; m. 1882, Caroline Maude, d. of John M Nicholson, J.P., Dublin; two s. Educ. : Wesley College, Dublin, Lord Mayor of Dublin, 1900-01; D.L. and J. P. of County and City Dublin; High Sheriff. Dublin, 1898. Heir: s. Colonel F. A. Pile. Address : Corringham Road, N.W.11. T. : Speedwell 3910. Club: Royal Societies.

(Adam & Charles Black 1967)

Barton, Dunber Plunkett 12 Mandeville Place, London. 13 Clare Street, Dublin. Constitution. Kildare Street and Sackville Street, Dublin. Eld. s. of Thomas Henry Barton, Esq., by his m. with the Hon. Charlotte Plunket, d. of the 3rd Lord Plunket. B. 1853. Educ. at Harrow and Oxford. Was called to Irish bar 1880, Gray's Inn 1898; Q.C. 1889. Private Secretary to the Lord-Lieut. Of Ireland, and afterwards to the

Lord Chancellor of Ireland (Lord Ashbourne); was Professor of the Law of Personal Property, Practice, Pleading, and Evidence at the King's Inns, Dublin 1885-88, and of the Law of Contract etc., from 1888-91; appointed Solicitor-Gen. Ireland Dec. 1897. A Conservative and Unionist. First elected for Mid Armagh 1891 and sat until appointed Irish High Court Judge in Jan. 1900. Judge of Kings Bench Division 1900-04; Judge of Chancery Division 1904-18. Created 1st Bart. 1918. Member of Irish War Homes Committee 1919; Chairman of the Industrial Court 1920; F.R.H.S.; Author of several works on Bernadotte (King of Sweden), Tim Healy and Shakespeare. PC. (Ireland) 1919. Died 11 Sept. 1937. (Stenton and Lees 24)

このように、タロンは1898年から1899年の2年間ダブリン市長を務めた人物で、パイルは1898年に州長官、1900年～1901年に1年間ダブリン市長を務めた人物である。上記で述べた様に、ダブリン市はこの時期には完全にナショナリストの支配下にあり、したがって、この2人はナショナリストである。O'Brien (86) は、パイルについて“Protestant home ruler”という記述をしている。それに対し、バートンはロンドン生まれの貴族出身であり、保守党でユニオニスト、司法の第2位である法務次官にまで上り詰めた人物であり、典型的な支配者側の人物である。最後の理由は、このように国と地方がナショナリストとユニオニストで分裂していることを暗に示唆しているのである。

しかし、それだけではない。タロンは、ダブリン市がボーア戦争に関してイギリスに抗議の声明をしようとした時に反対し、ナショナリストによる抗議活動の足並みを乱した人物であり、パイルは1900年のビクトリア女王訪問の際に市長としてあいさつを行なった。引用に下線を引いたが、Bt.というのは Baronet であり、あいさつをした際に男爵の爵位までもらって

いるのである。このようにパーネルの死後ナショナリズムが劣勢となり、ユニオニズムとせめぎ合いをしていた当時のナショナリスト達の足並みの乱れも暗示されているのである。

このように、ブルームがパントマイムのトピカルソングの作詞を考えていた1890年代は、ナショナリズムとユニオニズムがせめぎ合い、アイルランドは二分されていた時代であった。そして、何か政治的な話題を作品に盛り込もうとすると、必ず片方から攻撃を受けることが必至であり、文芸の創作が困難な時代であったのである。

2

次に、当時の劇場事情を考察することから、この一節について分析することとする。ブルームが作詞を依頼されたクリスマスパントマイムは、O'Brienが

The high point of every theatrical season was the Christmas pantomime, which often extended well into February. The Gaiety advertised itself as “Home of Pantomime,” not drama or opera. Yet the “pantos” were a very necessary part of the theatrical year, for they were highly profitable and enabled the managers to survive from season to season. Indeed, one might say they were vital in a city with such little employment for females, if only for the work given to hundreds of seamstresses each year in making up the elaborate costumes. (O'Brien 46)

と述べているように、クリスマスパントマイムは劇場にとって、大きな収益をあげる一年を締めくくる目玉演目であり、1870年代まではGaiety

Theatre と Theatre Royal が双璧をなしていた。ところが、1895年発行の旅行ガイド *The Dictionary of Dublin* が、

Gaiety Theatre in S. King street, at the top of Grafton street is a small but comfortable house. Since the burning of the old Theatre Royal, in 1880, it has been practically the sole theatre at which high-class entertainments are given. It seats about 2,000, and the stage is 45 ft. deep by 54 ft. wide. The Façade is plain brick work, and presents no architectural feature. (Cosgrave and Strangways 192)

と記しているように、1880年に古い Theatre Royal が焼け落ちてからは、Gaiety Theatre が高級なエンターテイメントを提供する唯一の劇場となった。しかし、1897年に Gaiety Theatre の存在を脅かす劇場が2つ誕生したのである。それが、新しい Theatre Royal と Grand Lyric Hall である。

再び O'Brien の説明によると、

The great days of the old Theatre Royal ended with its demise in 1880, burned to the ground as the curtain was about to be lifted on a benefit performance of the annual pantomime in aid of a local charity. It was reopened in 1897 with a 2,300-seat capacity on its old Hawkin's Street site and quickly became the home of Hippodrome and musical comedy. (O'Brien 45-46)

とあり、新しい Theatre Royal は、“the home of Hippodrome” となったという記述がある。また、Grand Lyric Hall の方も翌年には Lyric Theatre of Varieties, そしてのちに Tivoli Variety Theatre と名称を変えている。Hippodrome や Tivoli は、ミュージックホールのブランドネームである。当時、

イギリスではミュージックホールが最盛期を迎え、アイルランドの劇場も当然その影響を受けている。その結果、

As writers on the pantomime make clear, the genre has a long and worthy history, but in turn-of-the-century Dublin, the form was quite fixed. The larger parts of these productions were not mime at all but were full of dialogue, music, color, extravagant costume, corny humor, and scenic splendor. (Herr 104)

と Herr が述べているように、クリスマスパントマイムは道化芝居ではなく、音楽やダンスなどを中心とした総合エンターテインメントへと変化した。Broadbent (175) は、プログラムの最もよい部分は、ミュージックホールのスター歌手が担い、“Crown” や “Harlequin” は消えつつあると述べている。

ブルームが依頼されたトピカルソングとは、そのようにミュージックホールの歌手が歌う時事的な歌を指すものである。その代表的なものは、「ジンゴソング」(“Jingo song”) と呼ばれるもので、労働者たちに好意的愛国主義をかき立てるものであった。そして Herr (113-114) は、イギリスのミュージックホールで流行歌となったものがそのまま輸入され、アイルランドの劇場でも歌われたと指摘し、例として Theatre Royal による1902年のパントマイム *Sleeping Beauty* や1904年の *Dick Whittington* で、アイルランド人に対してはふさわしくない大英帝国を称賛する歌が歌われたことを挙げている。

彼女は例として2つのパントマイムを挙げているに過ぎないが、それらが Theatre Royal であることは示唆的である。Theatre Royal はその名前に明示されているが、王室の許可をもらった劇場ということであり、1904年にはエドワード7世が実際にこの劇場を訪れている。つまり、ユニオニズ

ムの機関と言っても過言ではない。それに対して、Grand Lyric HallはBurgh Quayに所在しているが、ここはかつてオコンネルがモンスターミーティングに使用していたConciliation Hallの跡地である。新築されたGrand Lyric Hallが何らかの政治的な役割を果たした事実はおそらくないが、その劇場の場所はいわば「ナショナリズムの聖地」として当時の人々の記憶にあったのではないかと考えられる。

そして、1897年にこれら2つの劇場が誕生したことで、Gaiety Theatreは、ナショナリズムとユニオニズムの狭間に位置することになる。語り手は、ブルームが歌を作れなかった3番目の理由として職業的な礼儀と職業的な競争心の葛藤があったとしているが、ライバルとなる2つの劇場の特徴であるユニオニズムやナショナリズムを利用することは、礼儀に反する行為であるとも考えられるし、それでもそれらをうまく利用して、観客の心をつかもうとする競争心でもあるのである。

また、この1890年代にはイギリスのミュージックホールでのジンゴソングにも変化が起きつつあった。次の引用は、ロンドンのCollin's music hallで1892年に楽屋に張り出された注意書きである。

No offensive allusions to be made to any member of the Royal Family; Members of Parliament, German Princes, police authorities, or any member thereof, the London County Council, or any member of that body; no allusion whatever to religion, or any religious sect; no allusion to the administration of the law of the country. (Mackenzie 30)

ミュージックホールは元々労働者階級の娯楽であるが、より多くの観客を取り込もうとした結果、王室への言及や特定の党派に関する言及を慎む方向に向かっていくことになった。その傾向は当然のこととして、イギリスからアイルランドへと伝わっていったと考えられ、ユニオニズムとナショ

ナリズムで揺れ動いていたアイルランドでは特に避けるべき話題である。

また、ジョイス自身も、王室への不敬な表現が原因で、『ダブリンの人々』の出版を断られ、『ユリシーズ』を掲載した『リトルレビュー』1920年1月号が郵送禁止処分になったことを考えると、王室について言及すると不要な検閲を受ける可能性があるのである。

このように検閲の問題もこの問答の背景にあることが伺える。1890年代、1900年代は社会純潔運動が最も盛んな時期である。社会純潔運動の主張では、劇場は性的な描写をし、女の子を墮落させる場所ということになり、さらにミュージックホールは売春婦が出入りしているということで攻撃の対象となっていたのである。

4番目の理由に登場するネリー・ブーヴェリストは、白い下着を露出させるとある。その表情は、「非知的、非政治的、非時事的」とあり、よく言えば世間を何も知らない無垢な女の子であるが、無垢を装って男性を誘惑する女性である。

Mullin (140-170) は、第13挿話のガーティについて、当時の「のぞきめがね映画」と同じ構図であると述べている。「のぞきめがね映画」の女優は、のぞかれていることに気づかず、日常の着替えをしているという演技をするのである。女優は自らを性的な商品にしているにも関わらず、あくまでも無垢であり、のぞきをする男性が悪いという構図作りをしているのである。ガーティも彼女の思考を写し取る語りを通して、自らの無垢を強調し、スカートを覗き込んで自慰をするブルームが悪いと主張しているが、相手を誘惑するために自らを性的な商品にしているのである。

ネリー・ブーヴェリストも、家族向けのクリスマスパントマイムでは下着を露出させることを主目的にしているわけではない。あくまでも舞台上でたまたま見えてしまい、それを目にした男性の観客は興奮するのである。

それが当時流行の性的商品であった。ガーティやネリー・ブーヴェリス

トは決してポルノ女優ではないわけだが、自らの性を商品にするという点では同じである。ブルームは、彼女たちによって性欲を掻き立てられつつも、彼女たちを軽蔑し、かわいそうな女性という憐憫の情を抱くわけである。そして、自らが猥褻と判断されかねない作品に関わることを躊躇したのかもしれない。Kate Neverist と Nellie Bouverie という2人の出演者の名前を組み合わせるのは、女優たちをすべて同じ系列に並べるという効果を持つと共に、ひとりの女優に猥褻のレッテルを貼り付けることを回避し、名誉棄損で訴えられることを回避するための配慮であるともいうことが可能である。脚本の名前を変えたのも同じ理由によるのではないかと考えられる。

これまで述べてきたように、ナショナリストとユニオニストがせめぎあっていた1890年代後半に新たな劇場がオープンしたことにより、ブルームは創作を試みようとした際に党派的にどちらの立場に立つべきかの選択に苦慮し、また当時の検閲事情により、創作を躊躇したと述べることができるのではないだろうか。

結論

1890年代は、ナショナリズムとユニオニズムがせめぎあっていた時代であり、また検閲を受けないように配慮しなければならない時代であった。ブルームは結局創作することができず、その後あれやこれや考えていたに過ぎないが、それらの悩みは当時文芸に関わっていた、あるいは志していた人たちにとってのものと共通のものであったと述べる事が可能である。

そして、それはジョイス自身にも当てはまるのではないだろうか。1890年代は、ジョイスは10代の若者で、思想形成期にあたる。ジョイス自身は父親の影響もありパーネル支持者であったが、『肖像』のクリスマスディ

ナーの場面に顕著に表されているように周囲は二分され、自らの政治的な立場をどこに置こうかに疑義が生じていたのではないだろうか。また、その後自らの作品が検閲や発禁処分を受けることになるが、オスカー・ワイルドを含め、先達者たちが迫害を受けている姿を見てとまどいを覚えたに違いなく、何が芸術で何が猥褻であるかに考えを巡らせていたのではないかと考えられる。それは、『肖像』の第5章に顕著である。

それゆえ、はっきりと政治的立場を表したり、検閲問題に言及したりすることはジョイス自身が攻撃を受けることになるので、語り手は不明瞭な解答しか伝えていないが、ナショナリズムとユニオニズムとの間で揺れ動いていた時代のアイルランドの姿を描き、検閲に震えていた作家たちの戸惑いを暗示しているのである。そして、ブルームの逡巡は、青年期に文芸を志そうとしていたジョイス自身や当時の作家たちの逡巡を表明したものであると考えられる。

注

本稿は、2012年6月16日に専修大学で開催された、日本ジェイムズ・ジョイス協会第24回研究大会の研究発表「ブルームはなぜパントマイムソングを書かなかったのか～背景にある政治と劇場事情～」の発表原稿に、加筆修正を施したものである。

参考文献

- 井野瀬久美恵『大英帝国はミュージックホールから』東京、朝日選書、1990
- Adam and Charles Black. *Who Was Who 1929-1940*. London: Adam and Charles Black, 1967.
- Baurle, Ruth H. ed. *Picking Up Airs: Hearing the Music in Joyce's Text*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1993.
- Broadbent, R.J. *A History of Pantomime*. N.p.: Benjamin Blom, 1901, reprint 1964.
- Cosgrave, E. MacDowel and Leonard R. Strangways. *The Dictionary of Dublin: Being a Comprehensive Guide to the City and its Neighbourhood*. London: Simpkin, Marshall, Hamilton, Kent and Co, Ltd, 1895.
- Gifford, Don and Robert J. Seidman. *Ulysses Annotated*. Rev.ed. California: University of

- California Press, 1988.
- Herr, Cheryl. *Joyce's Anatomy of Culture*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1986.
- Joyce, James. *The Critical Writings*. New York: Cornell University Press, 1989.
- — —. *A Portrait of the Artist as a Young Man*. London, Penguin Books, 1992.
- — —. *Ulysses*. London: The Bodley Head, 1986.
- Kenny, Mary. *Crown and Shamrock: love and hate between Ireland and the British Monarchy*. Dublin: New Island, 2009.
- Kenny, Kevin. ed. *Ireland and the British Empire*. Oxford: Oxford University Press, 2004.
- Loughlin, James. *The British Monarchy and Ireland: 1800 to the Present*. Cambridge: Cambridge University Press, 2007.
- McBride, Lawrence W. *The Greening of Dublin Castle : The Transformation of Bureaucratic and Judicial Personnel in Ireland, 1892-1922*. Washington, D.C.: The Catholic University of America Press, 1991.
- Mackenzie, John M. *Imperialism and Popular Culture*. Manchester: Manchester University Press, 1986.
- Marshik, Celia. *British Modernism and Censorship*. Cambridge: Cambridge University Press, 2006.
- Mullin, Katherine. *James Joyce, Sexuality and Social Purity*. Cambridge: Cambridge University Press, 2003.
- Murphy, James H. *Abject Loyalty: nationalism and monarchy in Ireland during the reign of Queen Victoria*. Washington, D.C., Catholic University of America Press , 2001.
- O'Brien, Joseph V. *Dear, Dirty Dublin: A City in Distress, 1899-1916*. Berkeley and Los Angeles : University of California Press, 1982.
- Stenton, Michael and Stephen Lees. *Who's Who of British Members of Parliament, Vol.2 1886-1918*. Sussex: The Harvester Press, 1978.